CA1
EA947
B71
#49 Jul.1983
DOCS

カナダ

特集・ブリティッシュ・コロンビア州

1983年7月
No. 49
ISSN 0389－1852

EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTÉRIEURES
OTTAWA
SEP 19 1983
LIBRARY / BIBLIOTHÈQUE

トピックス――2
特集・ブリティッシュ・コロンビア州――4
拡大する対日貿易――5
アジア・センター――5
ＢＣ州の主な産業――6
生まれ変わるバンクーバー――10
ロバーツ・バンク――11
カナダの人口動態――12
カナダの平均的家庭――13
カナダのファッション――14
われら姉妹都市⑩ 和歌山市＆リッチモンド・三崎哲男――15
カナダ人物記⑩ ピーター・C・ニューマン――16
編集後記――16

LIBRARY E A / BIBLIOTHÈQUE A E
3 5036 01030031 0
60984 81800

Bulletin Canada 発行 カナダ大使館

TOPICS

保守党党首にマルローニ氏 ケベック出身の実業家

カナダにおける連邦政界の最大野党・進歩保守党は六月十一日、オタワで党首選出党大会を開き、新党首に弁護士で実業界出身のブライアン・マルローニ氏(写真)を選出した。

新党首選出は、一月末の定例党大会でクラーク前党首（前カナダ首相）が信任を求めて辞任したことを受けて行なわれたもので、クラーク氏は結局、四回目の決選投票でマルローニ氏に二百五十九票の大差で敗退した。

五十六代党首となったマルローニ氏は、一九三九年三月生まれの四十四歳。ケベック州出身で、同州にあるラバル大学、セント・フランシス・ザビエル大学などを卒業、一九六五年に弁護士の資格を得た。ジェームズ湾開発にからむ争議で活躍して有名になる。今度の党大会まで、アイアン・オア・カンパニー・オブ・カナダ（鉄鉱石会社）の社長のほか、鉄道、保険、放送、鉱業などの会社の役員をつとめていた。

連邦議会議員の経験はない。八月末にノバ・スコシア州で行なわれる補欠選挙に立候補しており、そこで当選して初めて議会入りすることになる。ケベック州出身の進歩保守党党首は初めて。

モントリオールとガスペに五つの先端技術研究センター

ケベック州のモントリオール、ガスペ両地区に五つの重要な先端技術研究センターが、総額一億四百万ドルをかけて建設されることになった。

一番目のプロジェクトは、工費六千百万ドルでモントリオールに建設される生物工学研究センター。同センターは、遺伝子工学、特性診断薬品、獣医用ワクチン、他の複雑な研究をするためのバクテリア等微生物の利用など、生物工学の有力分野の基礎研究や長期研究を行なう。

第二は、モントリオール北方のラバル市に建設されるオフィス・システム・ビジネス・コミュニケーションズ研究センター。科学的オフィス・マネジメント技術やコミュニケーション技術の研究を行なう。

第三は、モントリオールの北、サントテレーズにあるリオネル・グルール・カレッジに新設されるケベック・コンピューター自動生産システム研究所。

第四は、モントリオールの西、ポワントクレールにあるパルプ・製紙技術研究センターの拡張。この拡張計画は、むこう十年間で紙・パルプ産業の技術開発と刷新を強化・多様化させるための業界、政府共同十か年計画の一環をなすもの。

第五は、ガスペ沿岸のモンジョリ地区に海洋科学研究センターで、海洋資源とそのアセスメント、海洋生物培養と資源開発、水位図の作成、海洋学・海洋生態学のプログラムを提示する。

カナダから「サイエンス・サーカス」〝触れて学ぶ〟七十点を巡回展示

楽しみながら科学を学ぶ「二十一世紀の博物館」として世界的に有名なオンタリオ・サイエンス・センターの一部が、今秋、日本で公開されることになった。

オンタリオ・サイエンス・センターは、一九六九年、カナダ建国百周年を記念して設立されたオンタリオ州政府の機関で、七百種以上の常設展示物があり、カナダ国内および世界各地から年間二百万人が訪れている。見学者が展示物を触り、操作し、あるいは実験してみることができる、というのが、同センターの最大の魅力。

サイエンス・センターでは、展示物の中から最も人気の高い約四十種七十点を選んで、「サイエンス・サーカス」という移動科学館をつくった。この「サイエンス・サーカス」は、過去数年間オンタリオ州内をまわっており、特に国際児童年の一九七九年にはカナダ各地を移動し、あらゆる年齢層の入場者に科学の楽しさを広めた。

「サイエンス・サーカス」の内部

こんど日本で展示されるのも、この「サイエンス・サーカス」一式で、内容は音声合成タイプライター、確率ゲーム、熱気球、人間や動物の胎児、手近なもので紙を作るペーパー・メーキング、静電気を利用して参加者の髪の毛をハリネズミのように逆立てるユニークな実験装置、人体のバランス能力測定など。日本では、展示物をコンテナ二台に収納し、楽しいイラストをほどこして、大型トレーラーで全国を巡回するという。

「サイエンス・サーカス」を日本に紹介するのは、株式会社シムコ（東京都港区元麻布三―六―二九電話 〇三―四〇五―八〇五一）。

ワカサギ汚染騒動――シロで決着

カナダ産のワカサギは百パーセント安全です――五大湖のひとつエリー湖でとれるワカサギが、猛毒の化学物質「ダイオキシン」に汚染されているのではないかとの報道で、出荷停止や販売停止などの騒ぎとなったが、これは全くの杞憂だったことが分かった。

汚染の報道について、カナダ政府は早速、「エリー湖で漁獲されて日本へ出荷されるワカサギは、一兆分率（ppt）の精度で検査されているが、ダイオキシンは全く検出されていない」と汚染を否定、関係省庁や報道機関にその旨連絡した。

日本の厚生省でも独自に検査したが、ダイオキシンは検出されず、「輸入ワカサギに汚染はない」との結論を出した。これを受けて、水産業者や商社はワカサギの入出荷停止措置を解除。大損失をこうむったといわれるカナダ側の業者も、疑いが晴れてひと安心というところ。

マクルーハン賞を設立

ユネスコ・カナダ委員会とテレグローブ・カナダ（国際通信公社）は、「メディアはメッセージである」などのユニークなコミュニケーション論で知られる故マーシャル・マクルーハン教授を記念して、「通信メディアと通信技術の社会的影響、特に文化的、芸術的、科学的活動に対するその影響についての理解を深める上で大きな貢献をした研究や行為を表彰する」国際的な賞を設立した。

この「マクルーハン・テレグローブ・カナダ賞」は賞金五万カナダドルおよび記念メダルからなっており、今年から二年ごとに贈られる。対象は個人またはグループで、国籍は問わない。（団体や企業は対象外。）

海水や汚水から飲料水
カナダ製の造水機を輸入

海水や河川水などを手軽に飲料水に変えてくれるカナダ製の造水機が、日本でも販売されている。

この簡易造水機は、ブリティッシュ・コロンビア州にある脱塩機専門メーカー、シーゴールド・インダストリーズ社が製作したもの。逆浸透（RO）膜を内蔵し、海水や汚水、河川水に圧力（逆浸透圧）をかけて水中の塩分や有機物、微生物を除去する。レバーを軽く動かすだけで、一時間に六リットルの清水ができるという。

日本で輸入販売しているのは、アルバックサービス（神奈川県茅ヶ崎市）。

カナダ関係の本、相次ぐ出版

最近、日本で、カナダ関係の本が相次いで出版されている。その主なものをあげてみよう――。

ジョイ・コガワ著、長岡沙里訳『失われた祖国』（二見書房）

工藤美代子、S・フィリップス共著『晩香坡の愛　田村俊子と鈴木悦』（ドメス出版）

工藤美代子著『黄色い兵士達　第一次大戦日系義勇兵の記録』（恒文社）

真壁知子著『写真婚の妻たち　カナダ移民の女性史』（未来社）

宮松宏至著『インディアン居留地で見たこと』（草思社）

煎本孝著『カナダ・インディアンの世界から』（福音館）

須磨未知秋著『赤い楓の国から』（創元社）

C・W・ニコル著、竹内和世訳『ぼくのワイルド・ライフ』（クロスロード）

ファーレイ・モウワット著、磯村愛子訳『船になりたくなかった船』（文春文庫）

カナダ産さくらんぼ
日本に初輸出

カナダ産さくらんぼが、今年、初めて日本にお目見えした。

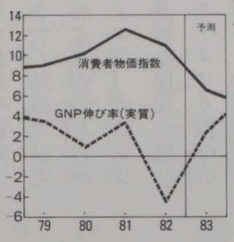
日本に輸出されたのは、気候と土壌に恵まれたブリティッシュ・コロンビア州オカナガン盆地で育ったランバート種で、粒が大きくて甘いのが特徴。七月上旬、日本政府が派遣した植物検疫官の立会いのもとに産地で品質検査を受けたのち、五千四百ケース（五十四トン）がフレッシュなまま飛行機と船で日本に出荷され、一般の果物店や八百屋、デパートなどで販売された。評判はおおむね上々。

カナダ経済が回復基調に
GNP、マイナスから脱出

長く低迷していたカナダの景気が、ここにきて大きく好転の気ざしを見せている。

まず一九八一年の第二・四半期からマイナス成長を続け、昨年は大恐慌以来最悪のマイナス四・八パーセントを記録した国民総生産（GNP）は、今年の第一・四半期に入って実質一・八パーセント（物価上昇分を含めた名目では三・四パーセント）の伸びを示した。在庫が昨年第四・四半期に続いて減り続け、住宅の売れ行きが増え、個人消費が好転したのが主な原因。

八一年以来、一時期を除いて下降し続けていた住宅着工件数は、四月以降も増加傾向にあり、また工業生産指数も上昇の一途をたどっている。



Statistics Canada

昨年は二ケタ台にあったインフレも、五月には一九七二年以来最低の五・四パーセント（年率）に下落した。

失業率だけは依然として一二パーセント台にあるが、インフレは今後も沈静し続け、経済成長率もラロンド蔵相が年初に予測した二・三パーセントをこえるものと見られており、製造業を中心に雇用は徐々に回復するものと思われる。雇用増大と景気回復に重点をおいた政府予算、米国経済の立ち直りといった明るい要因に支えられて、カナダの景気は上昇傾向をさらに強めていくものと期待されている。

テリー・フォックスの映画完成

がんで右脚を失いながら、がん研究募金のため義足でカナダ横断マラソンに挑み、途中で不帰の人となった青年テリー・フォックスの生涯が映画となって、六月からカナダとアメリカ（ペイテレビ）で上映されている。

ロバート・クーバー製作、ラルフ・トーマス監督で、主役はテリーと容貌も体格もそっくり、しかも十八歳でがんのため右脚を切断した点まで同じというエリック・フライヤー君が演している。

今年度は十五万三千台に
カナダ向け乗用車輸出枠

今年四月から来年三月までの日本製乗用車のカナダ向け輸出台数は、十五万三千台以下とすることで両国間で了解に達した。これは、今年一月から来年三月末まで十五か月間のカナダ向け乗用車台数は最高二十万二千台、という日本政府通産省輸出予測に基づくもの。

両国政府は二月中旬、今年上半期の輸出台数枠を暫定的に七万九千台と決め、改めて一月から来年三月までの台数を決める協議を続けていた。その結果、年度ベースで昨年より一万八千台少ない台数に落ち着いた。

リーガン通産大臣は、「これにより、カナダの自動車産業は国内市場での競争に対応する時間的ゆとりができた」と、日本側の措置を歓迎している。

部品の国内調達を勧告
自動車問題特別委員会

全米自動車労働組合（UAW）、カナダ自動車部品工業会、自動車製造業者協会および北米主要自動車メーカーの代表で構成する自動車問題特別委員会は、五月十九日、カナダに輸入されるすべての外国製自動車にローカル・コンテント（国産自動車部品調達）制度を適用するよう勧告する報告書を政府に提出した。国産部品調達率は当初八五パーセントにすべきだとの声もあったが、米加自動車協定で定められている率とほぼ同じ六〇パーセントに落着いた。

特別委員会は昨年十二月、「国内自動車産業のための戦略的・政策的代案を考慮する」目的で連邦政府が設置したもので、日本を含む外国自動車メーカーがカナダへの設備投資を増やし、カナダ経済にもっと貢献して欲しい、との考えから今度の報告内容になったといわれている。

特集

ブリティッシュ・コロンビア州

太平洋に面し、カナダの中で最もアジアに近いブリティッシュ・コロンビア州。入り組んだ海岸線と大小さまざまな島々、カスケード山脈と海岸山地、そしてロッキー山脈のきり立った山々、深い渓谷と幾条もの川――ブリティッシュ・コロンビアは国内で最も美しい州といわれ、また森林、鉱物、水産、水力などの資源に富む、カナダで最も恵まれた地域のひとつである。また州民のおよそ六割を占める英国系をはじめ、ドイツ系、スカンジナビア系、中国系など多様な民族が織りなす文化と、南から入るアメリカ西岸の文化が接触して生み出す雰囲気も、独特のものだ。

ブリティッシュ・コロンビアは、カナダの他の地域と同じく、もともとはインディアンの土地であった。その文化は、今でもトーテムポールや彫刻、織物などに見ることができる。十八世紀に入ってファン・ペレス、ジェームズ・クック、サイモン・フレーザーといった探検家たちがこの沿岸に到来し、毛皮貿易の時代が訪れる。やがてフレーザー川流域で金が発見されるとともに、この地域の政治的地位が問題となる。成立したばかりのカナダ連邦政府は、米国の食指を恐れて、大陸横断鉄道を太平洋沿岸まで延長することを約束。その結果、BC州は一八七一年、連邦に加盟した。

ベネット州首相

大陸横断鉄道が完成したのが一八八五年。ロッキー山脈によってカナダの他の地域から分断されていたブリティッシュ・コロンビアは、これで名実ともにカナダと一体化し、またカナダの太平洋側の玄関口となった。

BC州のプロフィール

州都	ビクトリア
州首相	ウィリアム・ベネット(社会信用党)
面積	九四八、五九六平方キロメートル
人口	二、八〇〇、五〇〇人(八三年一月)
主要産業	林産、鉱業、観光、農業、漁業

その後のBC州の発展は目覚しい。最近だけを見ても、州内総生産は一九六九年の九億八千万ドルから七九年には三十一億四千万ドル、八二年には約三十九億ドルに達し、今年は四十四億ドルに届く予想である。そして人口も、六九年二百万、七九年二百六十万、八二年二百八十万と、全国平均よりはるかに高い伸び率を示した。

こうした発展は、州の地理的条件と豊かな資源に負うところが大きい。まず森林資源は北米全体の四分の一を占め、州の山間部は、銅、石炭、モリブデン、亜鉛、鉛などの豊庫だ。石油と天然ガスも産出する。沿岸はサケやニシン、オヒョーなどの一大漁場であり、また農業も酪農や養鶏、果樹や野菜の栽培など、少ない農地をいかして州経済に貢献している。年間売り上げ約二十億ドルという観光も、州の一大産業だ。

BC州は、さらに、林産品、水産品あるいは農産品の加工や非鉄金属の精錬といった資源を基礎にした従来の製造業に加えて、輸送機器産業や化学産業、機械産業、金属加工業にも力を入れており、また先端技術産業も芽生えてきた。

BC州と日本とのつながりは大きい。昔から、カナダへ移住する日本人がまず腰をおろしたのがここであった。(周知のように、戦前BC州に集中していた日系人は、開戦とともに内陸部へ強制移動させられた。現在の日系人口は一万数千人。)そして今、バンクーバーをはじめ、ビクトリア、ロバーツバンク、プリンス・ルパートなどの各港から、州内で産出される角材、板、合板、新聞用紙などの林産品、石炭や銅などの鉱物、あるいは水産物が、またアルバータ州やサスカチュワン州から鉄道で運ばれてきた小麦、大麦、なたね、からしなどが日本向けに船積みされ、乗用車や電気製品など日本からの製品が降ろされる。BC州の港で積まれる物資の(価額にして)半分近くが米国向け、三分の一が日本向けである。石炭やLNGの共同開発も進んでいる。

往来するのは物資だけではない。日本からカナダへ旅する観光客は、ほとんどがバンクーバーを中心にBC州で名所を訪れ、買物をし、釣りやゴルフ、スキーなどを楽しむ。ブリティッシュ・コロンビア大学はカナダにおける日本研究のメッカで、研究者の交流も盛んだ。最近はまた、「サケよ戻れ」運動でもBC州と日本のつながりができた。

拡大する対日貿易

資源・エネルギーを中心に

ブリティッシュ・コロンビア州と日本との貿易関係はすでに半世紀を超えて積み重ねられてきた。とくにここ十年間の伸びは著しく、現在、日本はBC州にとって、米国に次いで第二の貿易相手国になっている。対日輸出は、恒常的に州の輸出全体の二〇―二五パーセントを占めており、カナダの対日輸出全体の半分以上がBC州産である。BC州はまた、カナダの対日輸出品の積み出し地でもある。一九八一年の州通関対日輸出額は三十七億七千万ドル。日本からの対加輸出全体にほぼ匹敵する金額の物資が、バンクーバーやプリンス・ルパートから日本へ送り出されているわけである。

BC州産の対日輸出品は、石炭、木材、銅(精鉱)、パルプ、アルミ、水産物など、資源関係の一次産品が最も多い。工業製品は、全体の一〇パーセント、化学製品と資源関連の機械類(掘削用ドリルや林業機械)があるだけである。

日本からの輸入は、乗用車、家電製品、鋼管類、オートバイ、トラック及び車台など、九五パーセントが工業製品となっている。

日本とBC州の経済協力関係は、貿易面でも投資面でも、今後いろいろな可能性をもっている。日本は今、非鉄精錬部門の近代化を図っており、アルミ、亜鉛、などエネルギー多消費型の精錬工場の立地として、原鉱もエネルギーも豊富で安いBC州は、うってつけといえよう。すでに幾つかの日本企業が関心を示している。

BC州への投資としては、安いエネルギー、発達した輸送網、日本と太平洋諸国に近いことなどから、非鉄精錬だけでなく、自動車部品の鋳造といった製造部門への投資も、今後のBC州・日本間の新しい経済関係を開く道のひとつである。昨年十一月、バンクーバー近郊におけるトヨタ自動車のアルミホイール工場建設計画が正式決定したニュースは、その好例といえよう。

BC州は、日本のエネルギー多様化政策にも協力できる。最近の日本・BC州間のエネルギー・プロジェクトとして、LNGと石炭をあげることができる。

天然ガスは、BC州西部で豊富に採れる。これを摂氏零下百六十二度以下に冷却・液化し、今後二十年間、日本の三電力会社と二ガス会社へ毎年二百九十万トン供給する、というのがこのプロジェクト。この計画の実現には、産地からプリンス・ルパートまでのガス・パイプラインや液化プラントの建設、LNG船の建造などに約三十五億ドルの費用がかかるが、日本はこのうち半分以上を資金協力する予定である。

しかし最近のBC州・日本の協力関係で、最大の話題は、何といっても北東炭の開発・輸出だろう。石炭を主として日本に輸出するために、広大なBC州北東部森林地帯が切り開かれ、炭鉱と都市と自然公園を含む開発地域が出現しつつある。

出炭は今年末から始まり、来年から十五年間にわたって、年間六百七十万トンの原料炭と百三十万トンの一般炭が、プリンス・ルパートの専用埠頭から日本へ運ばれる。そうなれば、日本の石炭総輸入量の四分の一がカナダ炭になる。(詳細は本紙九頁参照。)

日本とBC州間の貿易に、問題点がないわけではない。第一に、工業製品は日本、原材料はBC州というきわめて偏った構造が徐々にでも是正されない限り、いかに貿易量が増えようと、BC州側に不満が残る。BC州では、日本の消費生活の高度化に見合った輸出品として、たとえば加工食品やレジャー商品などの分野を強化していきたい、としている。針葉樹合板などの林産製品をめぐる関税問題も、今後の解決に残されている。

アジア研究のメッカ
アジア・センター

ジョージア海峡を見下ろすグレイ岬の森の中に、ブリティッシュ・コロンビア州で最大・最古の名門、ブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)が、静かにたたずんでいる。その構内の一番奥まったところに、BC州の首都ビクトリアで客死した新渡戸稲造博士を記念して作られた日本庭園がある。庭園のすぐ手前にあるのが、カナダにおけるアジア研究のメッカともいえるアジア・センターだ。

一九八一年六月に開館したアジア・センターは、もともと大阪万博のときのサンヨー館。UBC宗教学部準教授の飯田昭太郎氏が三洋電機に頼んで、枠組みを寄贈してもらい、日系の建築家が地上二階、地下二階の寄せ棟造りに改造した。五百四十万ドルの建築費は、経団連、日本博覧会記念協会、カナダ連邦政府、BC州政府などが負担した。

センターには現在、アジア研究学部、アジア研究所、アジア研究図書館、そして音楽学部、芸術学部、演劇学部のアジア部門がおかれており、UBCにおけるアジア研究とアジアに関する講義や講演、ワークショップなどの中心となっている。

来年五月、ここでセンターに五十万ドルの日本研究資金を寄贈した故大平首相の三回忌と新渡戸博士の没後五十周年を記念して、日本学の国際会議が開催される。

BC州の主な産業

BC州の産業は、その豊かな資源から生まれている。林業、鉱業、観光、農業、漁業――いずれも自然が与え、人間が上手に生かしあるいは育んだものである。製造業は生産高で第一位だが、それもこれら資源の加工が主な内容となっている。

林産業

州最大の収入源
輸出額でもトップ

BC州の発展を当初から支えてきたのは森林である。林業は、カナダ太平洋鉄道の完成（一八八五年）を契機に急速に発展し始め、今では州収入の約半分を稼ぐ州最大の資源産業となっている。

森林は州総面積の約五六パーセント、五十二万平方キロを占め、商業用木材資源の量は八十億八千二百万立米にのぼる。

BC州は、針葉樹の王国である。州内森林の九七パーセントが針葉樹であり、これはカナダの針葉樹林の六割に当たる。地形と気候によって大きく二つの森林地域に分かれ、暖かく雨量も多い沿岸山脈西側には、密生した大きな樹木が生育している。一方、沿岸山脈東の内陸地域は成長の遅い小さな樹木が多い。しかし広さは沿岸森林の六倍、約四千四百二十万ヘクタールもあり、年間生産高は沿岸地域の七倍である。

樹木の主な種類はヘムロック（米ツガ）、スプルース（針モミ）、バルサム、ロッジポール・パイン、レッドシーダー、ダグラスファー（米マツ）など。沿岸ではウェスタン・ヘムロックが多く（四一パーセント）、内陸部ではウェスタン・スプルースが主な樹種（三八パーセント）である。ダグラスファーは主として太平洋北西岸にしかないことから、値段も高く、植林の主要樹種となっている。

森林の九五パーセントは州政府が所有し、伐採業者は州から免許をもらって木の切り出しや管理育成を行なっている。

BC州の森林は、年間九千九百万立米の伐採が可能だが、一九七九年の伐採量は七千六百二十万立米であった。林業に従事する人は州内労働人口の約七・四パーセントにあたる九万四千二百人だが、ほかに一五パーセントの労働者が林業機械など関連分野で働いており、約五人に一人が森林関係にタッチしていることになる。製材所や合板工場などの木材関連業は、州内の製造業全体の中で第一位、紙・パルプなど製紙関係がこれに次ぐ。

BC州産木材で建てられる２×４住宅。
（写真・日本ツーバイフォー建築協会）

州の輸出品の中でも、林産品は金額にして全体の六五パーセントを占めて断然トップ。八〇年には五十七億ドルの林産物を米国、日本、EC諸国へ輸出した。輸出額で見ると、木材（二十四億六千百万ドル）、パルプ材（十八億九千八百万ドル）、新聞用紙（五億三千万ドル）の順。

BC州は、アメリカを含む北米全体の樹木の四分の一を有するとはいえ、乱伐は厳に戒められている。州政府は一九七九年に新しい森林法を制定し、免許業者に対して森林管理の徹底をはからせ、政府もまた資源調査や管理状況調査を定期的に行なう措置をとった。

七九年には、林産業の活力を長期的に確保することを目的として連邦政府と州政府が森林管理協定を結んだ。これは総額五千万ドルをかけ、五年間にわたって森林資源育成の諸施策を講じ、長期的な雇用の増進と伐採量の増加を図ろうというものである。

近年に至って、国内的には自然公園など保護区域の拡大、伐採規則の厳格化、あるいは伐採地の奥地化などによって、国際的には米国南部やブラジルとの競合によって、業界も長期的な森林資源の保護育成、伐採・輸送・製造の近代化を迫られてきた。BC州では、丸太輸送にヘリコプターや気球を導入し、品種改良に努め、森林利用の多角化を図っている。

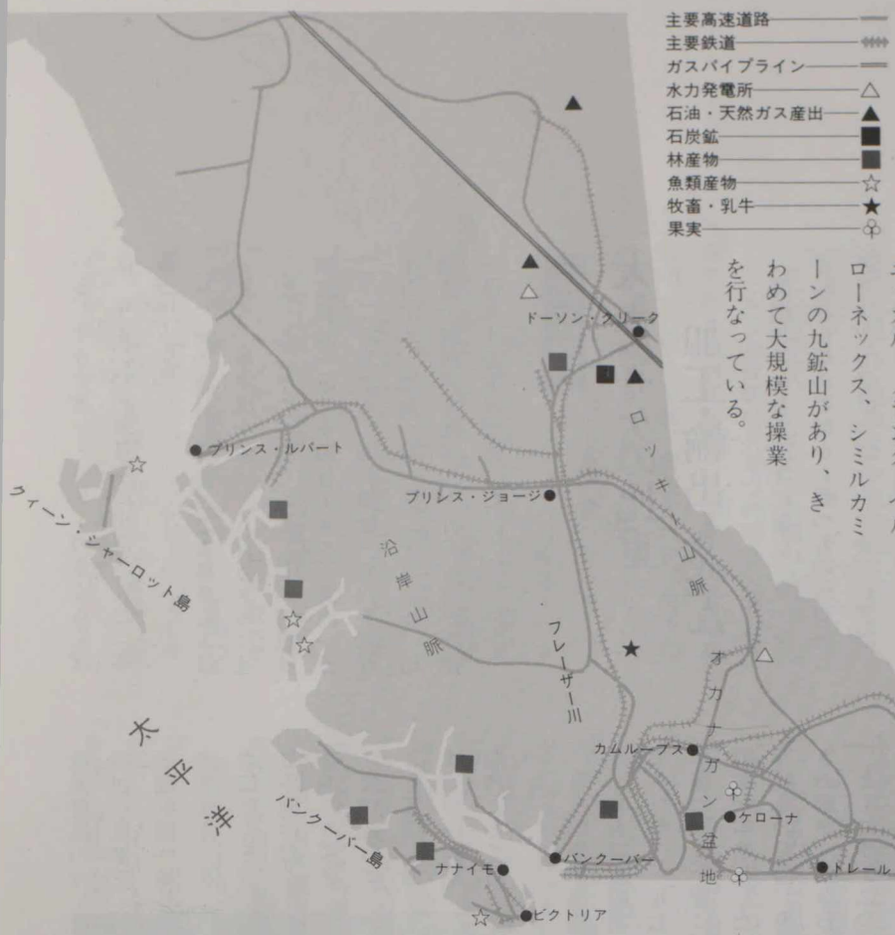
鉱業

豊富な金属・非金属
進む石炭・油田開発

BC州第二の産業は、鉱業である。州の大部分は、幾多の鉱物の発見で有名なカナダ・コルディレラ層に属しているため、いろいろな鉱物や化石燃料が豊富に産出されている。

金属では銅、モリブデン、金、銀が四大産品で、このほか亜鉛、鉛も多い。アスベスト、硫黄などの非金属鉱物も産出している。

一九八二年の鉱物生産額（概算）は二十八億ドル。このうち銅が四億八千万ドル、モリブデン一億八千四百万ドル、銀一億三千六百万ドル、金一億一千二百万ドル、アスベストや硫黄等工業原料鉱物



が一億一千万ドルとなっている。

昔から世界的に有名な鉱山として、キンバリーのサリバン鉱山とトレールの鉛・亜鉛鉱山がある。サリバン鉱山は、BC州で最も早く開発された鉱山のひとつで、現在も世界の鉛・亜鉛の主産地として知られている。トレールは、カナダ最大級の鉱山会社であるコミンコ社の拠点のひとつで、鉛・亜鉛の精錬では量、技術ともに世界最先端にある。

銅とモリブデンは、露天鉱として有名なアイランド・コパー、ブレンダ、エンダコ、ベツレヘム、ジブラルタル、グラニッスル、ノランダ・ベル、ローネックス、シミルカミーンの九鉱山があり、きわめて大規模な操業を行なっている。

過去十数年における世界市場の伸びに対応して、BC州鉱業界は盛んに探鉱や拡張を進めてきた。最も顕著な例がモリブデンで、六〇年代半ばまではBC州で採鉱されていなかったのが、現在では世界第二位、全世界の産出量の約一五パーセントを占めるまでになった。

BC州の鉱物の中で金属に劣らず重要なのが化石燃料である。生産額（八二年）では、石炭五億七千三百万ドル、原油三億二千八百万ドル、天然ガス五億五百十万ドルと、トータルで金属を凌いでいる。

BC州東南部のクロウズネスト炭田を主産地とする原料炭は、年産一千万トンを超え、ほとんどが日本に輸出されている。一般炭はカナダ東部や合衆国に出荷され、燃料多様化の趨勢の中で重要性が高まってきた。

石炭業界は、ここ数年の経済不況によって短期的な生産停滞を見ているとはいえ、長期戦略にもとづいて、いくつかの開発計画が進行中である。

東南部の露天鉱で有名なカイザー、地下鉱のフォーディング両鉱山では操業拡張が進行中、またクロウズネスト・インダストリーズ社では新鉱山を開発中、そのほかBCコール社のホズマー・ウィーラー、リオ・アルゴム社のセージクリーク、クィンテット・コール社のウォルベリンなどの新鉱山の開発計画、エッソ・リソーシズ社のバイロンクリーク鉱山大規模拡張計画などが目白押しに進められており、州東南部からの出炭能力は、一九八五年までには現状のほぼ二倍に達する見通しである。

今、日本で大きな注目を浴びているのが、BC州北東部の石炭開発である。北東炭開発は、一九八一年、日本の製鉄会社とBC州石炭企業との間に、年間六百七十万トンの原料炭を向こう十五年間供給するという長期契約が調印され、その時点から本格的に開始されたBC州史上最大の開発プロジェクトである。（詳細は九頁参照）

北東部はまた、北米大陸の大平原の延長として、現在州内で石油と天然ガスを産出する唯一の堆積層でもある。商業生産の歴史は比較的新しく、一九五七年の天然ガス・パイプライン、六一年の石油パイプラインの完成を待って本格的な操業に入った。現在では、天然ガス生産高は石炭と肩を並べ、またどの金属よりも多い。石油生産高は天然ガスほどではないが、モリブデンや金・銀の二、三倍にまで増えている。

農業

果樹栽培で有名
りんご、あんずなど

ブリティッシュ・コロンビア州の大半は山と森林で、農地は全体のわずか二パーセントにすぎない。しかし、〝サケの川〟として世界的に有名なフレーザー川の下流流域では養牛、養豚、養鶏、酪農が盛んだし、フレーザー川流域やバンクーバー島では、ラズベリーやストロベリー、ブルーベリー（カナダ全体の九〇パーセントを産出）のほか、ぶどう、あんず（カナダの食用あんずはほとんどすべてここで生産される）、トマト、スイートコーンなどが栽培されている。カナダには珍らしい温暖な気候に恵まれたバンクーバー島では、花卉や観賞植物の栽培も行なわれている。

またカスケード山脈とモナシー山脈に挟まれたオカナガン・バレー一帯は、果物の産地として有名。特にりんごは南部ではデリシャス種、気候条件が厳しい北部ではマッキントッシュ種のカナダ随一の産地である。そのほか、梨、桃、さくらんぼ、あんず、プラムも栽培しており、BC州をはじめ国内で消費されて

いる。オカナガン・バレーのさくらんぼは、今年、初めて日本に出荷された（本紙三ページ）。

BC州の食品、食肉による農業収入は、一九八〇年には七億五千五百万ドルに達した。七〇年の三倍である。その内訳は、酪農製品一億七千四百十ドル、食肉一億二千二百万ドル、園芸植物一億八千八百十万ドル、家禽・卵一億二千万ドル、植物油・飼料四千九百九十万ドル、その他一億九十万ドルであった。

水産業

大きいサケの比重
加工・輸出も盛ん

黒潮の流れる太平洋に面し、ロッキーや沿岸山脈の谷間から幾つもの川が海にそそぐブリティッシュ・コロンビアは、大古の昔から漁業（漁労）が盛んだった。沿岸は、ニシン、オヒョウ、シタビラメや、ピンクサーモンなどのサケが豊富で、特にサケはフレーザー川で大量にとれる。

BC州の漁獲高は年間三～五億ドル。冷凍、缶詰、スモークなど関連加工業を含め、漁業は州における基幹産業のひとつである。

漁民一万二千人、漁船七千七百隻。百三十の加工工場に働く三千五百人を含め、陸上で水産関係の仕事に従事する人は六千人を数える。水揚げされる魚は三十種以上。そのうちサケは総漁獲高の六割を占める。カズノコがこれに次ぐ。総漁獲高の六割が、世界三十数か国へ輸出される。そのほとんどが日本向けだ。日本のカズノコ買い占めによる価格変動は、つい数年前のことであった。

BC州沿岸漁場は、長い間、主として外国の大型漁船団による乱獲で荒らされてきたが、一九七七年、二百カイリ漁業水域の設定を境に、政府の魚類資源保護政策が本格化した。魚の人工孵化場、産卵経路の整備、漁獲量制限の実施などがきめ細かく行なわれている。

とくにサケについては、連邦政府と州政府が共同でサケ資源増強計画に取り組み、一九九〇年を目標に放流稚魚を五千万トンに増やし、漁獲量を現在の二倍にまで高めようとしている。

工業・先端技術

資源ベースの製造業
先端産業も端緒に

BC州の製造業部門は、その豊富な資源がベースになっている。林産業、非鉄精錬金属、水産加工品、農産物加工品が、製造業の中心で、そのうち材木、パルプおよび紙がおよそ半分、そして第二の食糧品が一五パーセントを占める。

また木材伐採や製材、合板などに使われる機械や設備、材木や鉱石を運ぶためのトラック、鉱業や建設で用いられる設備機械も製造しており、製造業部門の工場出荷総額は百五十七億ドル（一九八〇年）に達している。

一方、州は先端技術産業の育成にも力を入れている。先端技術産業は、今のところ、BC州の四大産業（林業、鉱業、観光、漁業）と比べてきわめて弱小だが、州としては今世紀末までに一大産業に育てたい意向である。

BC州は、これまでもエンジニアリング・コンサルタントの分野で知られ、林業、鉱業、漁業、発電、運輸、海洋開発、地質化学調査、宇宙工学などにその技術をいかしてきた。このエンジニアリング技術に加えて、最近はブリティッシュ・コロンビア大学、ブリティッシュ・コロンビア工科大学、ビクトリア大学、サイモン・フレーザー大学に研究開発公園（デイスカバリー・パーク）ができているほか、バンクーバーの南約四十キロのホワイト・ロックは、パシフィック・マイクロサーキット社など、二百を超すエレクトロニクス・メーカーや技術研究機関が集中する先端技術センターになっている。

またブリティッシュ・コロンビア大学の核物理研究施設TRIUMFには、素粒子物理学、核物理学、固体物理学などの分野における各種の高エネルギー核素粒子を実験用に製造できるサイクロトン（イオン加速器）を備えており、常時、内外の科学者およそ二百五十人が研究活動を行なっている。TRIUMFでは、今年から、カナダ原子力公社の子会社レイディオケミカル社との生産協定により、米国とアジアに産業用および医療用放射性物質を輸出する予定である。

観光

身近な大自然が魅力
多い外国からの客

太平洋とロッキー山脈にはさまれたブリティッシュ・コロンビア州。温暖な気候に、全長一万二千キロに及ぶ複雑に入り組んだ海岸線、沿岸に点在する六千五百以上の島々、緑濃い森林とそれを背景に美しいスカイラインを描く都市、幾重にも折りなす高峰、そして氷河や渓谷――この州ほど変化に富む美しい自然に恵まれたところも少ない。ブリティッシュ・コロンビア州が、国内だけでなく、米国や日本をはじめ、世界各国から毎年一千万人近くの観光客をひきつけているのも、この気候と大自然の魅力にある。

人々は例えばバンクーバーでは買物や国際色豊かな食事を楽しみ、市内公園と

しては世界最大のスタンレー・パークを散策し、水族館でイルカやシャチの妙技を見、バンクーバー発祥の地ギャスタウンやその近くの中華街を訪れ、あるいはグランビル島の新しい文化村、新渡戸記念庭園や、トーテムポールなどの展示で知られるブリティッシュ・コロンビア大学民族学博物館に足を運ぶ。フェリー（海上バス）やヨットから見るバンクーバーの眺望もすばらしい。

あるいはまた州都のビクトリア。エンプレス・ホテルから二階建てバスに至るまで、英国風の彩りが濃いこの町は、気候と環境の良さで年配の人たちには特に人気が高く、余生をここで過ごす人々も少なくない。

BC州では、一歩都市を離れると、そこはもう大自然だ。五つの国立公園と三百を数える州立公園。三百三十もある高山湖。七つの氷河。野花が咲き、野生の動物が徘徊する大自然の中で、釣り、ハイキング、乗馬、イカダ乗りやカヌー、山登り、ゴルフ――と、あらゆるアウトドア・レクレーションを楽しむことができる。冬はスキー。みごとな景観に息をのみながら、人々は山腹を滑っていく。かつて金鉱で栄えた山間の町を訪れるのも感慨深い。

エキスポ86の開催で、観光地としてのブリティッシュ・コロンビアはさらにその声価を高めるだろう。観光は、年間の売り上げが約二十億ドルに達し、BC州にとって林業、鉱業に次ぐ一大産業となっている。

北東炭開発計画

世界最大の炭鉱
出炭開始も間近

見渡す限りの針葉樹林が高く、低くうねるように続き、一部切り開かれて浅い雪をかぶった平地では、ブルドーザーや建築機械が忙しく動いている。ここBC州北東部、ドーソンクリークの南西約百キロにある一帯で、BC州史上かつてない大規模な開発工事が進められている。

二つの露天炭鉱を新規に開発し、年産合計八百万トンの上質炭を生産しようというのが、この北東炭開発プロジェクトだ。掘り出した石炭は、大半を日本が買い取ることになっており、日本にとってもきわめて重要な意義をもつプロジェクトである。

プロジェクトは、直接開発費二百五十億ドルをかけた一種の総合開発であり、七本の柱を持っている。

(1)炭鉱。クィンテット・コール社とテック・ブルムース・コール社が二つの鉱山を建設する。クィンテット炭鉱はカナダ最大の原料炭の鉱山として年産合計六百三十万トンの原料炭と一般炭を産出する。テック炭鉱は年産百七十万トンの原料炭を産出する予定。

(2)ニュータウン。ロッキー山脈のタンブラー・リッジに炭鉱従業員とその家族のためのニュータウンを建設する。商店、学校、病院、文化・娯楽施設など生活に必要な施設一切を含む近代都市となるはずである。

(3)鉄道。BC鉄道がプリンス・ジョージとチェトウィンドの中間点からタンブラー・リッジ・ニュータウンまでの百二十九キロを山を越え、谷を渡って結ぶ新線を建設。同時に既設線の輸送能力アップも図る。新線は山岳地帯を通るため、全長九キロと六キロの二本のトンネルが含まれ、すでにあらかた完成している。一方、カナダ国鉄（CN）は、プリンス・ジョージから太平洋岸のプリンス・ルパートまで伸びる既設線の能力アップを図り、かつ石炭を運ぶ専用のユニット・トレインを製作中。

(4)送電網。BC電力がG・M・シュラム発電所から炭鉱とニュータウンへ送電する電線網を、すでに昨年十月、完成した。

(5)道路。州の運輸省が、チェトウィンド＝タンブラー・リッジ間に全長九十二キロの二車線高速道路を建設。合わせてドーソンクリーク＝タンブラーリッジ間のヘリテッジ・ハイウェーの拡幅工事も進行中。

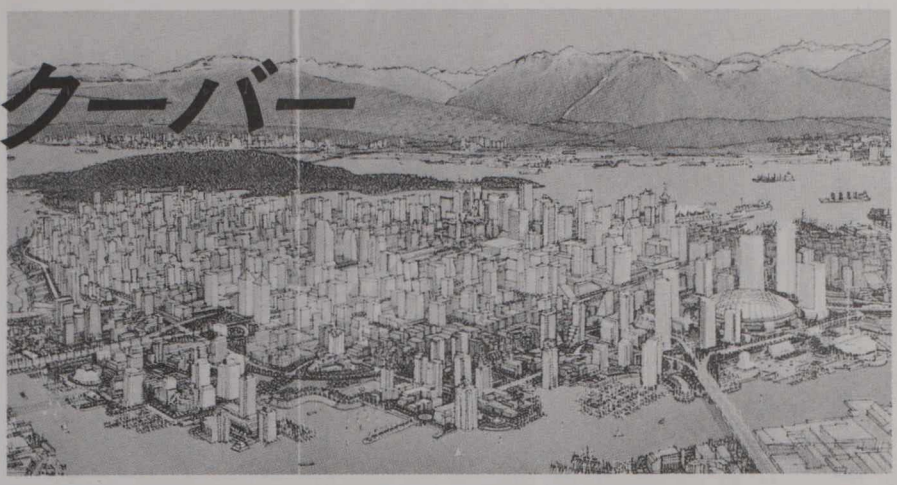
(6)港湾。カナダ港湾公団が、プリンス・ルパートのリドリー島に石炭専用ターミナルを建設し、リドリー・ターミナルズ社が世界最大のローダー荷役など設備を新設する。そのほかプリンス・ルパート港自体も、二十五万トン級の鋼炭船が接岸できる埠頭が今年末に完工する。

(7)州立自然公園。クィンテット炭鉱から南へ二十キロ離れたモンクマン州立公園、ブルムース炭鉱から北西へ二十キロ離れたサクンカ・フォールズ州立公園が完成。そのほかグィリム・レーク州立公園はすでに保養地として訪れる人も多い。深い森林と渓谷、豪壮な滝、谷間に咲き乱れる夏の花など、雄大な北東部の自然が人々の来訪を待っている。

炭鉱を初め、町も鉄道も、橋も道路も、七月段階でほぼ完成に近づいており、今年末、本格操業が開始されれば、炭鉱に二千人、関連事業に千人、カナダ全体で年間四万六千人分の雇用創出が見込まれている。さらに、チェトウィンドやドーソン・クリークなど周辺地域の発展、インフラストラクチャー整備による今後の開発投資の軽減など、州に与える利益は多大なものになるはずである。

もともとこの開発は、日本との石炭売買契約成立を待って、現実化したものだけに、日本との関係は非常に深いものがある。九億五千万ドルの国際協調融資には、日本の銀行が参加しているし、輸入が始まれば、日本の石炭総輸入量の四分の一がカナダ炭ということになる。

生まれ変わる バンクーバー



86年のエキスポ（国際博）を控えて、バンクーバーがいま大きく変わろうとしている。新しく生まれつつあるバンクーバーをご紹介しよう。

●都市再開発

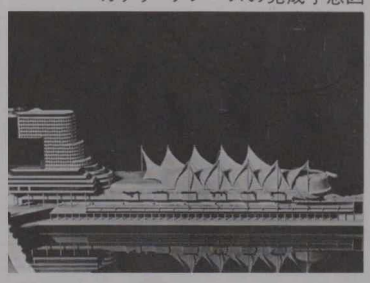
バンクーバーでは、すでに市中心部のロブソン・スクエアが、庭園、レストラン、美術館、裁判所などを配置した街に大きく変貌したが、現在さらに二つの再開発計画が進行中だ。

まずバンクーバー港に建設されるカナダ・プレース（広場）。エキスポの開催直前に完成する予定のカナダ・プレースは、七千人収容の貿易・会議センター（エキスポ開催中はカナダ館として利用される）、遊覧船停泊所、五百室を備えた近代ホテル、通常の三十五ミリ映画の十倍も大きい大スクリーンで映画を見せるIMAX劇場などを、湾からつき出たBC埠頭に配置したもので、完成すればバンクーバーの一大アトラクションになる。カナダ・プレースは連邦政府によるバンクーバー湾岸再開発プロジェクトである。

カナダ・プレースの主要施設であるホテルとワールド・トレード・センターについては、東急電鉄がデベロッパーとなることで、カナダ・ハーバー・プレース公社（CHPC）と同社の間で基本的合意が成立している。基本契約の期限は九月六日だが、東急としては契約したら来年四月に着工する予定。完成したホテルとオフィス・スペースは、東急グループが所有することになる。

もうひとつは、フォールス・クリーク北岸の大再開発計画。これはエキスポ86の会場を用意するとともに、二十五年をかけて大競技場、遊園地、公園、野外劇場や専門劇場、芸術・科学・技術センター、商業地域、住宅地域などを作ろうというもので、競技場はすでに完成した（本紙第四十七号）。

カナダ・プレースの完成予想図



二百数十エーカーにのぼるこの再開発地域――BCプレース――は、バラード入江に近い都心に対して、いわば新都心となる。バラード入江の南岸に建設されるカナダ・プレースとフォールス・クリークの北岸にできるこのBCプレースは、八六年に完成する予定のリニアモーター駆動の快速電車によって簡単に往き来できるようになる。

そのほか、かつては工場や倉庫、鉄道の待避線が雑然と散らばっていたフォールス・クリーク入口のグランビル島が、再開発によってさまざまな劇場や画廊、エミリー・カー美術学校、工芸品店、公衆市場、レストランなどの建ち並ぶ〝文化村〟に変身した。

●EXPO86

バンクーバーの市制百周年とカナダ横断鉄道の同市到来百周年を記念して開催されるエキスポ86は、会場の準備も進み、また参加予定国も増えて、いよいよ成功への期待が高まっている。

エキスポ86のテーマは「交通と関連通信」。世界各国が、エネルギー・コストの上昇、都市人口の増大といった問題を抱え、一方で交通・通信の技術革新が目覚しい現在、きわめて時宜にかなった企画といえよう。

エキスポ86の第一の魅力は、まさにこの点にある。カナダは、その広大な国土を克服し、東西約六千キロに拡散して住む国民の統一を図るためにも、歴史的に輸送と通信には特別の関心を払ってきた。この特性は、現在、カナダの技術をいかしたさまざまな輸送手段や輸送機器、あるいは通信機器や世界的に評価の高いニューメディアにも、よく表われている。

もちろんカナダ以外の諸国も、輸送と通信には力を入れており、カナダは各国が製品や技術の紹介にエキスポ86を利用するよう呼びかけている。これまでに、英国、米国、サウジアラビア、インドネシア、オーストラリア、フランス、スペイン、ペルーなど、十六か国が参加を表明している。

エキスポの主会場となるフォールス・クリーク北岸

これらの国々のほかにも、カナダの各州政府、米国のワシントン州、カナダ大平洋鉄道やカナダ国有鉄道などの企業が参加することになっており、その数はさらに増えるものと思われる。

第二の魅力は、会場がバンクーバー市内であるため、交通や宿泊に便利なこと。別記のように、フォールス・クリークの北岸を中心とする主会場とバラード入江沿岸の会場地区ではエキスポ86に備えた再開発事業が進行中。両会場をつなぐ高速鉄道も、八六年始めには完成の予定である。

第三の魅力は、カナダだけでなく、米国という一大市場を控えていること。これは出展する各国や各企業にとって大きな意味をもつ。五月二日から十月十三日の会期中に、一千五百万人の観客が訪れるものと予想されている。そのおよそ半分は米国から（約百万人はその他の諸外国から）のお客さん、という見込みで、出展者にとっては製品や技術を売り込む絶好の機会となる。

なお、エキスポと並行して、バンクーバーの市制百周年を記念する、競艇、ロデオ、映画祭、芸術・科学展、音楽祭などの催しものも、エキスポ会場をはじめ、市内各地で開かれる。

●リニアモーターカー

バンクーバーに電車が戻ってくる——。

バンクーバーで初めて電気鉄道網が敷かれたのは一八九〇年、最初の市外電車が米バージニア州リッチモンドで生産されてからわずか二年後のことであった。人口たった一万四千人、二十分もあればどこでも歩いて行ける、というほどの小さな町であったが、交通網だけは北米の多くの都市より進んでいた。

市街電車は、曲折をへながら発展を続けたが、自動車の普及によりすたれ、一九五五年にはバンクーバーから姿を消してしまう。残った大量旅客輸送機関はバス、トロリー・バスおよび海上バスだけ。しかし、交通混雑に巻き込まれるバスの評判はあまり良くない。市内に高速道路を通す構想も、市民の反対でつぶれた。

そこで浮かび上がったのが、市街電車の近代版ともいえる高速電車。そしてBC州政府が採用したのが、オンタリオ州の都市交通開発公社が開発した中量旅客輸送システム（ICTS）。

ICTS（バンクーバーでは新型軽量快速輸送システム＝ALRT＝として知られる）は、最新技術の自動制御・リニアモーター駆動方式を用いたもので、まず第一期工事として、一九八六年一月までにバンクーバー市街からニュー・ウェストミンスターまで二十一・四キロの路線が完成する予定。電車はバラード入江に面するウォーターフロント（埠頭）駅——そこで海上バス、陸上バス、ポート・コキトラムからの通勤電車と接続——を起点に、いったん岸に沿って西へ向かい、高層ビル街の下を通る旧ダンズミュア・トンネルに入って急カーブを切り、完成したばかりのドーム型大競技場のところで再び地上に出る。そこから市内を南東にほぼ直進してニュー・ウェストミンスターへ向かう。バラード湾の海上バス発着場近辺にはエキスポ86のカナダ館が、また大競技場からフォールス・クリークの沿岸にかけてはエキスポ本会場がおかれることになっており、ALRTは両会場を結ぶことになる。

ALRTは四両または二両（夜間、日曜日）編成で走り、時間当り約一万人（最高三万人）を運ぶことができる。現在、市内各地やニュー・ウェストミンスターなどの郊外から、約十万人の通勤者が毎日バンクーバー市街に流れ込んでいるが、フォールス・クリークの北岸で開発が進んでいる一大商業・住宅地域「BCプレース」が完成すると、その数はさらに膨れあがる。ALRTは、バンクーバーおよびその近郊の発展のために、どうしても必要な輸送機関なのである。州政府ではこのALRTを、将来さらに近郊に延長する計画だ。

拡張される巨大石炭港ロバーツバンク

混雑をきわめるバンクーバー港の石炭専用分港として、足かけ15年間頑張ってきたロバーツバンク埠頭で、いま拡張工事が進んでいる。年内にも第1期工事が終わると、積み出し能力は倍増されるという。

ロバーツバンクは、バラード入江のバンクーバー内港から30キロ南のフレーザー・デルタに、ジョージア海峡へ突き出るようにして作られた人工島。当初は面積20ヘクタールの石炭ターミナル（写真の島の右下、黒い部分）を1面だけ持ち、年間1,000万トン前後の石炭やコークスを積み出していた。10年程前から大規模な拡張計画が進められ、各20ヘクタールのターミナル3面の追加造成、島と本土を結ぶ堤道の拡張（従来は単線だった鉄道の複々線化）、長い防波堤の構築（写真右下）など、新しいロバーツバンクの全容がようやく、姿を現わしてきた。

新しいターミナル3面が全部完成すれば、年間5,000万トンの石炭・コークスが、州東南部からユニット・トレインでここへ運ばれ、さらに日本など太平洋諸国へ送り出されていくことになる。

カナダの人口動態（一九八一年）

進む高齢化と西部移動

カナダが一九八一年七月一日、十年ぶりに行なった本格的な国勢調査の結果が、徐々に明らかになってきた。

それによると、カナダの総人口は二千四百三十四万三千百八十人で、中間調査が行なわれた一九七六年と比べて五・九パーセント増えた。七一年からの増加率は一二・九パーセントで、十年間としては一九三一―四一年（一〇・九パーセント）に次いで低い。

州別の人口は、最大がオンタリオ州で全体の三五・四パーセント（七一年は三五・九パーセント）、二位がケベック州で二六・四パーセント（同二七・九パーセント）を占めた。両州の人口を合わせると全体の六一・八パーセントにのぼるが、七一年の六三・八パーセントと比べると大きく減った。ニュー・ブランズウィックなど大西洋側四州の人口は、十年間で全体の九・五パーセントから九・二パーセントに落ちた。一方、マニトバ、サスカチュワン、アルバータ、ブリティッシュ・コロンビアの四州とユーコン、北西の二準州は、今や全人口の二八・九パーセント（七一年は二六・八パーセント）を占め、国内人口の西部移動を印象づけた。

都市の中で人口増加が最も著しいのは、やはり西部カナダのカルガリー（十年間で二五・七パーセント）、エドモントン（一八・一パーセント）、サスカトゥーン（一五・三パーセント）などで、トロントは七・〇パーセント、モントリオールは〇・九パーセント伸びただけだった。

人口動態の変化で一番目立ったのは、国民の高齢化。例えば、十五歳以下の人口が五年間で七パーセントも減ったのに対し、六十五歳以上は一七・九パーセントも増えた。全体に占める六十六歳以上の比率は、九・七パーセント（七六年は八・九パーセント）に達している。

高齢化が進んだ結果、メジアン（中間）年齢は、一九七六年の二十七・八歳から五年間で二十九・六歳に上昇した。メジアン年齢とは、全人口の中央値で、今世紀初めには二十歳強だったのが、出生率が低下した一九三〇年代の大恐慌時代に二十七歳にはね上り、一九六一年にはベビーブームのために二十六・三歳に下がっていた。この中央値は出生率が急上昇しない限り、今後も上昇し続け、二〇〇〇年には三十六歳に達し、二〇三一年には一人の年金生活者を二人の労働者が支える計算になるという。

七六年の中間調査で初めて明らかとなった都市から農漁村へのUターン現象は、八一年の国勢調査ではさらに顕著になった。七六年から五年間で、農漁村人口は八・九パーセント増えたが、都市人口はおよそ半分に近い五パーセント増にとどまった。非都市人口の全体に占める比率は約二五パーセント。

Uターン現象は、農業人口にも反映し、一九三〇年代以来初めて、減少に歯止めがかかった。農業人口は四十八万千二百七十五人。

職業も大きく変化した。七一年からの十年間に法律やソーシャル・ワーク、マスメディアなど社会科学的分野で働く人は一三八パーセント、管理職で一一八パーセント、芸術や文学、レクレーション分野で一〇五パーセント、科学、数学、エンジニアリングなどの分野で七二パーセントも増えた。もっとも多くの人が従事しているのは事務職で全労働人口の一八パーセント（二百十九万人）。サービス分野（一二パーセント）、セールス分野（九パーセント）がそれに続いている。

これまで男の仕事と思われていた分野への女性の進出が目ざましく、七一年と比べて女性のエンジニアは五倍、弁護士は六倍、計理士は三倍、運転手は四倍も増えた。

大学卒業者の数は成人全体の八パーセント、約百五十万人に達した。一九七一年の四・八パーセント、七十一万九千人のおよそ二倍である。教育程度が最も高いのはユーコン準州で、大学進学率は四五・八パーセントに達している。アルバータ州（四一・五パーセント）、ブリティッシュ・コロンビア州（四〇・四パーセント）がそれに続いた。

英仏二つの公用語のうち、英語のみを話す人口は十年間で一一・四三パーセントも増加したが、フランス語だけしか話せないと答えた人は二・七八パーセントしか増えていない。英仏両語とも話せる人は二六・九六パーセントと大幅に増えており、政府の二国語使用政策（バイリングァリズム）が浸透してきたことを物語っている。一方で、いずれの公用語も話せない人は、八・七六パーセント減った。

カナダにおけるフランス語圏の中心で、

		増加率（1971／81）
総人口	24,343,180（男12,068,290 女12,274,890）	12.9%
ブリティッシュ・コロンビア	2,744,467	25.6%
アルバータ	2,237,724	37.5%
サスカチュワン	968,313	4.5%
マニトバ	1,026,241	3.8%
オンタリオ	8,625,107	12.0%
ケベック	6,438,403	6.8%
ニュー・ブランズウィック	696,403	9.7%
ノバ・スコシア	847,442	7.4%
プリンス・エドワード・アイランド	122,506	9.7%
ニューファンドランド	567,681	8.7%
ユーコン準州	23,153	25.9%
北西準州	45,741	31.8%
公用語		
英語のみ話す	16,122,900	11.4%
仏語のみ話す	3,987,240	2.78%
英仏両語を話す	3,681,960	26.96%
いずれも話さない	291,395	−8.76%
母国語		
英語	14,918,445（全人口の61%）	5.6%
フランス語	6,249,095（〃 25.6%）	6.1%
宗教		
カトリック	11,402,605（全人口の47.3%）	
プロテスタント	9,914,580（〃 41.2%）	
ユダヤ教	296,429（〃 1.2%）	
東方正教会	361,565（〃 1.5%）	

一九七六年に分離独立を綱領に掲げるケベック党政権が誕生したケベック州では、英語だけを話す人口が大幅に減り、フランス語のみを話す人口がわずかに増えるという現象を見せた。しかし、両公用語を話す人は二四パーセントも増え、ここでも両語使用の傾向が高まった。

また英語を〝母国語〟だと答えた人は約千五百万人（一九七六年から五・六パーセント増）、フランス語と答えた人は約六百二十五万人（六・一パーセント増）だった。五年間で特に増えたのはスペイン語（五九パーセント増）、アルメニア語（六五・八パーセント増）、中国語（六五・八パーセント増）、インド・パキスタン語（一〇〇・三パーセント増）など。

人口を宗派別に見ると、最も多いのがカトリックで、全人口の四七・三パーセント。プロテスタントが四一・二パーセントで、両者を合わせると八八・五パーセントになる。あとは東方正教会（一・五パーセント）、ユダヤ教（一・二パーセント）など。人口の七パーセント弱は国勢調査の「宗教欄」に何の記入もせず、約一万五千人が不可知論者または無神論者と答えた。

カトリック教徒が大半を占めるのはケベック州（州人口の八八・二パーセント）とニュー・ブランズウィック州（五三・九パーセント）。あとの八州は、プロテスタントが多い。

またアジアからの移住者が増えた結果、仏教徒は十年間で二二三パーセントも増え（増加率では最大）、約五万二千人に達した。

カナダは移民の国といわれるが、今度の国勢調査でも総人口の約一二パーセント（三百八十六万七千百六十人）は外国生まれとなっている。そのうち最も多いのはヨーロッパ出身（二百五十八万六千八十人）だが、その数は十年前と比べて若干減少した。一方、東南アジア生まれは十年前のわずか二万六千二十五人から十五万二千五百九十人へと激増。その他のアジア各国から移住してきた人も、十四万人弱から三十九万人に増えた。

家計収入（平均）は、七〇年から八〇年の十年間で二八・四七パーセント上昇し、二万六千七百四十八ドルに達した。最も多いのは二万五千ドル以上三万ドル未満の層で、八十万五百四十家族がその中に入っている。（十年前に最も多かったのは、一万七千ドル以上二万ドル未満だった。）また平均所得が四万五千ドル以上の家族は、七十一万七千九百十五と、十年前の三倍近くも増えた。

国勢調査では、そのほか、①世帯数が一九七六年から五年間に百十一万五千四百三十五も増えて八百二十八万千五百三十となり、また六人以上の大世帯の数が大幅に減って四人以下の小世帯が増えた②片親だけの家族は五年間に約二八パーセント増加した（全家族に占める割合は一一・三パーセント）③家族数は五百七十三万から六百三十二万に増えた④既婚者は約九パーセント増え、また離婚者は六五パーセント増の五十万人に達した―などを明らかにしている。

カナダの平均的家庭

平均的カナダ人とはどんな人たちか。バンクーバーの新聞「プロビンス」が統計局や国税庁、保険会社や銀行の資料から合成したカナダの平均的家庭とは、夫婦に子供二人の四人家族。夫は三十六才で、妻は三十二才。夫の年収は二万八千ドル。妻の時給は十四ドル三十三セントで、年収二万二千ドル。夫婦の手取りの合計は、平均すると約四万ドルだ。

郊外に八年前に建てられた三寝室の家を一年前に十万ドルで購入。頭金一万ドルで、九万ドルは借金。その支払いが月々千四百八十ドル。十万ドルの家にかかる固定資産税は千百ドル。しかし持ち家に住んでいると助成金があるので、支払う税金は正味七百二十ドル。昨年家を買った時は金利が一八・五パーセントと高かったので、一二パーセントの借入れに切換え、月々の支払いを千ドル程度に下げたいところだが、そうすると四千四百五十ドルの反則金が痛い。

この平均的家族が買う食料品は、月に四百ドル。しかし子供とマクドナルドやケンタッキー・フライド・チキンに行ったり、ピーナツやポテトチップをつまみながらビールを飲むと、食費も月五百ドルにはね上がる。ビールやワイン代の四十ドルは別。この家庭の電気・ガス代は、一か月百二十八ドル（BC州の電気代は東部に比べて格安）。

マイカーは二台。七六年型の大型ステーション・ワゴンと八〇年型の日本製小型車。この二台にかかるガソリン代と修理費が、月百十五ドル。自動車保険は無事故の三五パーセント割引き込みで、古い大型車が年二百三十ドル。新しい小型車は年六百十ドル。

住居にかける火災保険の保険料は、年二百五十ドル。そのほかに住宅ローンを借りているために払わなければならない保険料が、月間三十五ドル、年間で四百二十ドル。生命保険は掛け捨てで、保険額は夫が十万ドル、妻が二万五千ドルの保険金。保険料は合わせて年に四百ドル。

月に三千三百ドルの手取り収入で、支出は三千ドル。三百ドルを貯金にあてて、セントラル・ヒーティングの故障や屋根の修理など不時の出費に備える。

怪我や病気をしても、医療費を心配する必要がないのはカナダのありがたいところ。B・C州では健康保険に一人月十五ドル。家族なら三十二ドル払えば、診療所の診察でも、心臓の大手術でも、医者の費用は一切払ってもらえる。入院しても、外国人は一日につき六百九十八ドルも支払わなければならないが、カナダ人や移住者は一日わずか七ドル五十セントですむ。個室でも三十五―四十五ドルだ。（S&S発行「カナダレター」Vol.9, No.3より転載）。

カナダのファッション

シンプルさに遊びを加味

カルダン、サンローラン……そして今、カナダのアルフレッド・サンが、ファッション界の檜舞台に登場した。

米誌「サックス・フィフス・アベニュー」はアメリカで最も人気のある新進デザイナー十人の筆頭にサンを挙げ、「ヴォーグ」誌も好んで彼のデザインを載せている。「サンのスポーツウエアはこれまで見た中で最もビューティフルだ」、と評する服飾専門家もいる。

アルフレッド・サンはパリのエコール・ド・ラ・サンジカル・ド・ラ・クチュールを首席で卒業し、現在トロントやニューヨークを拠点に年商二十五億円の活躍ぶりだ。

サンのモットーは、「きわめてシンプルで、体にフィットし、単に見た目に美しいというのでなく、機能性に富む服を作ること」にある。彼は言う―。

「私は、スタジオでデザインし、美人にだけ着てもらうというのではなく、ブティックで実際に普通のご婦人方と会い、一緒に考え、実際に着てもらって反応を見る、というやり方でやってきた。」

見た目の美しさと同時に、着心地を重視するサンに、〝着心地のいいオートクチュール〟、〝手の届くハイファッション〟との評価が高まっている。

カナダのファッションの特徴は、第一に、北米の女性に不可欠なシンプルさを基調に、ヨーロッパ風の〝遊び心〟を合わせ持っている点にある。

クラシック派のレオ・シュバリエ（カナダ・デザイン界の王と言われている）、ジョン・ウォーデン（パーフェクト・プロポーションのレディス・ウエアで有名）、ミシェル・ロビショー（カナダ・デザイナー協会の初代会長）、セルジュとレアルのコンビ（モントリオールのハイファッションを代表）。

〝遊び〟派のウェイン・クラーク（豪奢なカクテル・ドレスを得意とする）、マリリン・ブルックス（〝遊び〟派の旗手。色と素材のパイオニアを自認）。

ビジネス着・カジュアル派のフランク・スパツィアーニ、マーガレット・ゴッドフリー（レザーとスエードにすぐれたタッチを発揮）、カジュアル派のパット・マクドナフ（ビートルズやダイアナ・リグの映画衣装をデザイン）――など多くのデザイナーが活躍し、国際的な賞も数多く取っている。

お国柄、特に強いのが冬物。四年前にユーゴスラビアで開かれた国際ファッション・フェスティバルでは、「ウールやツイード、毛皮の使い方が素晴らしい」と、カナダ勢は絶賛を浴びた。

メンズ・ウエアの分野では一九八〇年の国際服飾デザイナー協会（IACD）の賞七部門のうち、カジュアル部門でフランク・スパツィアーニ、ビジネス・スーツ部門でサント・ガロ、フォーマル部門でビクター・ブラッジズが優勝している。シュバリエ、ロビショー、ウォーデンはクラシックの現代化を追求、ロベール・シェルナンやガブリエル・レビはレザーやスエードを生かしたスポーツウエア、コート類に個性を発揮している。

こうしたカナダ人デザイナーの成功の理由は、品質重視にあると同時に、デザインを消費者の個別の要求に合わせるその柔軟性にある。カナダのファッション企業は比較的規模が小さく、大量生産でない所に、魅力を放っているといえる。

世界的に見れば、カナダのファッション業界はまだまだ若い。伝統ある有名店や新種素材の話題は少ないが、それでもここ二十数年の実績が、今後の発展に大きな期待を持たせてくれる。

セルジュ・エ・レアルの作品

マリリン・ブルックヌの作品

アルフレッド・サンの作品

レオ・シュバリエの作品

われら姉妹都市 10

和歌山市&リッチモンド

和歌山弁が通用する町

三崎 哲男

早いもので、BC州リッチモンド市との姉妹都市提携も十周年に達した。この四月十五日には、プレア市長一行十名が、姉妹都市提携十周年記念と昨秋の宇治田和歌山市長を団長としたリ市訪問への答礼を含めて来和。市民の大歓迎のなか、記念植樹や公式行事を滞りなく終え、十年の友好交流を積みあげて来た歴史の重みを強く感じさせた。

リ市は、和歌山（日高アメリカ村）の移民を百年も前から受け入れた遠くて近い仲だった。リ市には日系人が三千五百人位おり、市の総人口約十万人から見ると非常に多い。同市スティーブストンには、日系人の街もあり、立派なお寺、武道館、ジャパンセンターをもっている。今でも和歌山弁が通用する懐しいところでもある。カナダで初めて日本語の勉強を学校に取り入れ、先般NHKテレビで報道された。

移民当初は殆んどが漁業一本であったが、二世三世の今日は公職、医者、会社経営と各界にも広く進出し、真面目で尊敬されるカナダ人としてがんばっている。市議会議員の熊谷さん、リ市姉妹都市協会副会長のジミー小嶋さん、まつたけ博士の坂本さん、と多士彩々……われわれにとってもほんとうに嬉しいことである。

その影響か、日本の演歌も大人気。われわれとのパーティーでも歌合戦にやんやの拍手が起こる。リ市姉妹都市協会前会長のグッドウィンさんは、〝カラスなぜ鳴くの……〟と明快な日本語で立派に歌ってくれる。パーティーのラストは必らず紀州おどり。ブンダラ節のメロディーにのって、日加全員ウチワを片手に輪になって、〝ツレモッテ コイコイ〟と舞い踊り、溢れる友情と感謝に和気あいあいのなか、再会を約して幕をとじる。

姉妹都市提携十年。その実績は年々歳々濃く、輝やかしい。リッチモンド市から和歌山市への来訪は、約五百人。和歌山市からリ市への訪問は、千人をこす。昭和五十六年四月には、和歌山市立城東中学とリ市ロンドン中学が姉妹校となった。さらに日加両市の青少年が積極的に文化、スポーツを通じて交流しているし、ホームステイも活発である。はじめは白人を泊めることに抵抗があり、受入れ家庭を探すのに苦労したが、役員の努力と市民の理解で、今ではいつでも喜んで応じてくれる家庭が百に上っている。この前は、ロンドン中学から来た一行の中に、全盲の少女ジェニー・エマリーさん（十四歳）がいた。彼女は和歌山市での印象をこう話している。

「和歌山市の人々は、とても親切で私も自然にうちとけることが出来ました。楽しい和歌山の日々は一生忘れません。特に市内の横断歩道に設置されている盲人用信号機の音楽が、大変印象に残っています。みんなに遅れることもなく歩き出せますし、それに信号機ごとに曲（メロディー）が違うのでとても楽しい。こんな素敵な設備はまだカナダにありません。」

和歌山市は市長が全国空手剛柔流連盟会長をつとめるほど空手が盛んだが、リ市にも空手師範を送り、大変なブームを巻き起こしている。青い目の黒帯が、どんどんふえているということだ。

和歌山市は今後も、民間平和外交を、卒先して展開して行きたい。

（和歌山国際姉妹都市親善協会）

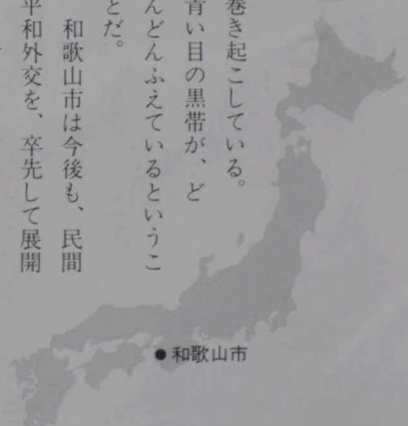
和歌山市加太ビーチでスイカ割りを楽しむリッチモンドの人々

――・――・――・――・――

リッチモンド市は、バンクーバーのすぐ南、フレーザー川の河口に浮かぶ二つの大きな島といくつかの小島から成る、バンクーバーの近郊都市である。一番大きいルル島はバンクーバーと二本の橋で結ばれ、またシー・アイランドにはバンクーバー国際空港があって、カナダの空の西玄関口となっている。

気候が温暖なうえ、三角洲から成っているために土地が肥沃で、農業（特に園芸）に適している。林産加工業や鉱業も盛ん。しかし最も知られているのは漁業だ。特にルル島の西南端スティーブストンは、昔から日系人による漁業で栄えてきた。

和歌山市が一九七一年に姉妹提携をしたのも、リッチモンドに同県出身（特に御坊市美浜町）の移住者が多かったことが大きな契機となった。両市とも大都市（和歌山市の場合は大阪）を近くに控え、発展の可能性や問題点が似ていること、も主な理由である。



カナダ人物記⑩

ベストセラー・ジャーナリスト
ピーター・C・ニューマン

一九七一年から八二年までカナダの代表的ニューズ週刊誌「マクリーンズ」の編集局長をつとめたピーター・C・ニューマンは、カナダ屈指のジャーナリストとして知られているが、彼の名声を特に高めたのは七五年に出版されベストセラーとなった著書The Canadian Establishmentとその続編The Acquisitorsである。

ニューマンは、五九年以来、カナダの代表的財界人を紹介したFlame of Powerやディーフェンベーカー政権を扱ったRenegade in Powerなどカナダの政財界に関する本を何冊か書いている。The Canadian Establishmentは、こうした実績をもとに、バッド・マクドウゴールド、ネルソン・デービス、ニール・マキノン、ロイ・トムソンといった、カナダにおけるビジネス界のエリートたちについて、生い立ちから、経営手腕、性格、財力、権力に至るまでジャーナリスティックな筆致で描いたもので、「カナダに関する最上のガイドブック」(ケネス・ガルブレイス)と称賛された。

一九四〇年、ヒットラーに追われて家族と共にウイーンからカナダに逃げてきた十一歳のニューマンが、まず言葉を覚え、働きながら大学を卒業し、そしてジャーナリズムの世界に入ったのは一九五一年のときだった。

マクリーンズ誌やトロント・デーリー・スター紙のオタワ支局長時代に、カナダの国内政治に関して三冊の本を書いたように、ニューマンの本来の関心は政治にある。しかし六九年にトロント・デーリー・スターの編集局長になったとき、トロントの財界人が大きい権力を握っているのに、彼らについて誰も書かないことに気づく。それがThe Canadian Establishmentを書くきっかけになった。ニューマンのエスタブリッシュメントへの関心はさらに続き、Bronfman Dynasty(一九七八)、The Acquisitors(一九八一)、The Establishment Men(一九八二)を生む。

The Canadian Establishmentではトロント周辺を中心に発展した、いわば既存の財閥グループがテーマになっている。

ピーター C. ニューマン

The Acquisitorsの主役は、旧勢力の死去や引退のあと、彼らの財産や事業を引き継いだフレッド・イートンやケン・トムソンといった人々、そして資源開発や不動産業、宇宙産業などで成功した新興事業家たちだ。カナダの事業家はここ数年で大きく世代交代した。しかし、もっともっと斬新なアイデアをもった、意欲的な事業家が輩出しなければカナダは生き残れない、とニューマンは言う。

カナダの政治については、どう考えているだろうか。これから一年もすると、カナダの政界地図は大きく変わる、というのがニューマンの予想だ。まず進歩保守党の党首にケベック出身の元実業家が選ばれた。トルドー氏も近い将来、引退する可能性が強い。トルドー氏の後継者には、英語圏出身で、西部でも人気のある、実務型の人がなるだろう。

心配の種はケベック州。レベック州首相は次の選挙でケベックの分離について賛否を問うことを表明しているが、野党であるケベック自由党には党首もいず、しかもトルドー氏が引退すれば、州民を説得できる人物がいなくなる。だからケベックは時限爆弾のようなものだ、とニューマンはいう。

ニューマンの、日本に対する期待は何だろうか。

「日本はもっとカナダの製造業に投資し、(カナダにおける)米国の影響力を薄めて欲しい。米国と違って、日本人は自分たちの生活様式を他国に押しつけない。だから米国からの投資より、日本からの投資を歓迎したい。」ニューマン氏は、カナダの経済的・文化的自立を目指す「自主カナダ委員会」の創設者の一人である。

編集後記

●日本人にとって、カナダの中で一番なじみがあるのは、バンクーバーあるいはブリティッシュ・コロンビア州でしょう。一八三〇年代に遠州灘で難波した船が、約一年後に三人の生存者を乗せて漂着したのはブリティッシュ・コロンビア沿岸だといわれていますし、カナダに渡った日本人移住者がまず腰を落ちつけたのも、ブリティッシュ・コロンビアでした。

●戦争、そして日系人の強制移動という暗い歴史もありました。しかし戦後、カナダと日本の関係は緊密化の一途をたどり、特にカナダの太平洋諸国重視政策と相まって、太平洋をはさむブリティッシュ・コロンビアと日本との関係も深まってきました。この特集号で明らかなように、両者は切っても切れない縁で結ばれているようです。

●本紙は次号で創刊五十号を迎えます。皆様のご支援のおかげです。今後の参考にしたいと思いますので、本紙に関するご感想やご意見をお寄せいただければ幸いです。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107東京都港区赤坂七丁目三一三八
カナダ大使館広報部